

5月6日、管総理は中部電力に対して浜岡原発の運転を防潮堤の設置など中長期の対策が完了するまでの間として標記の要請をしました。

この措置に対して、英断であるという賛成論と唐突で説明・根拠不足であるとする疑問説が提起されています。

私は目的論として、本件は、以下のように考えるべきだと思います。

「目的」は、原発が事故を起こして放射性物質を拡散させないことです。「ねらい」は、当然、地域および海外を含む周辺の住民に健康被害を与えないことです。

なぜ、放射性物質が拡散するかというと、原発の運転中止後、原子炉及び核燃料プールの冷却を実施できないことが原因です。

地震で、設備が損壊することは論外です。今回の地震でも、どの原子炉でも致命的な損壊は確認されていません。

冷却するためには、以下が必要です。

1. 通常電源が確保できる
2. それができない場合、予備電源が稼働し冷却系が動く
3. そのためには、予備発電機が動く、燃料が確保できる、海水ポンプが動く、の3条件が必要です

逆に言えば、高い津波が襲ってきても、3. の条件が満たされれば、放射性物質の拡散は起きないのです。

現に、福島第1とほぼ同じ環境にあった福島第2原発が、被災後3日目の14日には冷却に成功して事なきを得ています。想定津波の高さは、第1が5.7メートル、第2が5.2メートルで、ほぼ同じです。

その点からすると、防潮堤の建設は、不要か念のためであり、上記1. 2. 3. の対策が先でしょう。おそらく、この3対策はコストも期間も防潮堤の構築より小さいはずで。

先入観で津波を避けようという発想は、目的喪失以外のなにものでもありません。至急、再検討をお願いしたいものです。

なお、この目的論からすると、他の原発も同じような見直しが必要です。

「ふたば公園のトイレの電気」と題して、以下のメールを4月23日に品川区役所に送りました。当ブログでもご紹介しました新しい公園のことです。

4月10日にオープンしたふたば公園の前に住む者です。ふたば公園の男子トイレの電気は、非常に明るいものが2灯常時点いています。

節電が重要な時で、先日から近隣の街灯が2分の1に間引かれて道路がうす暗くなっている中で、明らかに違和

感があります。1灯で十分だと思われます。女子・多目的トイレの方は扉が閉まっているので分かりませんが、同じ対応が必要かもしれません。早急にご対応ください。

そうしましたところ、数日後確認すると、該当のトイレの電気は男女分とも1灯になっていました。ついでに公園内の街灯3灯も消灯状態になりました。周りの街灯で不安状態は発生しないという判断でしょう。私の意見でそうなったのかどうかは別として、「そくやる」はたいへん結構なことです。その後、5月20日付で、品川区都市環境事業部長から以下の文章が届きました。

前文省略

ふたば公園のトイレの電気についてのご意見にお答えいたします。

4月27日夜にトイレを確認いたしました。ご指摘のとおり男子トイレには2灯設置してあり、新しい照明器具と壁からの反射光により1灯で十分の明るさを確保できることが分かりました。

したがいまして、翌28日に男子トイレと女子・多目的トイレを1灯点灯にいたしました。

今後とも、より良い維持管理に努めてまいります。貴重なご意見をありがとうございました。

私の意見が引き金になったようでした。

今回の対応についてのコメント

1. 対応は早かった。◎
2. 鵜呑みにしないで現場を確認している。○
3. 2灯設置の正当化をしている。△
4. 手紙が遅かった。△

多少のことはあっても、「どンドンやる」ことはたいへん良いことです。頑張り品川区役所！！

その公園のトイレの写真です。



低放射線は身体に良いという学説です。私の友人である株式会社世界出版の社長茂木弘道氏からの情報提供です。ミズーリ大学教授ラッキー博士の実証報告の紹介です。

「低線量の放射線は有害ではなく健康に良い」というものです。

茂木氏のコメントは私以上に歯切れがよいのです。ラッキー博士の説を紹介している以下のコメントをご覧ください

さい。

ラッキー博士は宇宙飛行士の健康検査を10年以上にわたって研究し、NASAに報告を出しています。結論として、「健康に良い放射線レベルは年間100ミリシーベルト」としているようです。

ラッキー博士が異議を唱えているLNT(Linear No Threshold) (放射線の害は高レベルから低レベル0に向かって連続している)は、1946年度のノーベル生理学・医学賞受賞者のH. J. マラー博士の仮説です。

マラー博士はショウジョウバエのオスへの放射線照射によってこの仮説を検証したのですが、とんでもない落とし穴がありました。

現代の細胞学では、我々の体内には何百というDNA修復酵素があり、1日当たり100万ものDNAの損傷を修復していることが分かっています。低線量放射線は、この修復酵素を刺激し、修復機能を強化し、免疫力を高める作用があることが明らかとなってきたわけです。

ではなぜ、マラー博士の実験ではこのことが分からなかったのかというと、何とショウジョウバエのオスの精子は、「DNA修復力」を持たない極めてまれな例であったからなのです。

つまりこういう異常な生物を実験対象にしてしまったマラー博士の研究仮説の普遍性は「ゼロ」であることが今や分かったわけです。

現在でもこういう間違っただけの陳腐な理論が「ノーベル賞」をもらったということで、学会と世界の世論(?)を支配しているというのがどうも実態であるようです。

ノーベル賞だろうがなんだろうが、間違っていることは間違っている、これが単純明快な真理だと思うのですが、如何でしょうか。

少なくともグラフ1、2a、2c、2dなどをみれば、100グレイ(約100ミリシーベルト)以下の被曝者は通常の人より、ガン死亡率が低いことは明白です。

例の小佐古参与は、20ミリシーベルト基準は自分のヒューマニズムが許さないといいましたが、正しくは、自分の『無知』が許さないといいなおすべきではないでしょうか。LNT仮説は明らかに間違っています。

グラフ2.a.をみると、長崎の被曝者の白血病死亡率は、0.100グレイよりも310-690グレイ(略ミリシーベルト)の方が低い、というよりもこのレベルの被曝者の死亡率は何と0となっています。

グラフ2.c.によると広島、長崎の白血病死亡率は、140グレイで、一般平均となるが、それ以下ではかなり低くなっています。特に72グレイの被曝者は一般の20%のレベルとなっています。

このように、100ミリシーベルト(略グレイ)という数字は、安全であるだけでなく、むしろ健康にはプラスの効果がある、と考えた方が実態にあっているということです。

そのメカニズムの解明も進んでおり、カリフォルニア大学名誉教授核医学会のDNA研究大御所のマイロン・ポリコープ博士と放射線分子生物学創始者ルードヴィヒ・ファイネンデーゲン博士が1996年に発表した論文で以下のように結論づけています。

「活性酸素によるアタックは、自然放射線の1000万倍で、われわれの細胞は1個あたり毎日100万件のDNA修復で生命を維持している。

したがって、低線量放射線の身体影響の問題は、放射線によって損傷を受けるDNAを、生命活動としてのDNA修復は、そのように防御できるかの問題であって、瞬時にDNAをたたきこわした原爆の話でも、またDNA修復機能の無い特殊な細胞が介在したマラーの実験結果でも無い。」(特殊な細胞とは例のショウジョウバエの精子の事)

低放射線照射は活性酸素を破壊する酵素を増加させ、細胞修復酵素を活性化させ、ガン抑制遺伝子p53を活性化させるなどの働きにより、放射線による細胞破壊を上回る、細胞修復、活性化を行う事が明らかになってきたという事です。

したがって、どのレベルが最適かという事は、未だ研究段階といえるわけですが、少なくとも低線量は身体に有益な効果を与える、という事は確実な科学的真実です。

ICRPの安全基準ですら、100ミリシーベルトとなっているのに、日本政府は、LNT仮説(すなわちどんな微量でも放射線は毒、悪という考え)に安易に追随し、超安全を見込んで愚かにも20ミリシーベルトという基準値を設定して、福島の人々を苦しめています。

(上野注)ICRP(国際放射線防護委員会)の基準は、平常時または一般の人の年間限度を1ミリシーベルト、職業人(レントゲン技師など)の平時は、1年間50ミリシーベルト(5年間で100ミリシーベルト以内)、職業人の緊急時は年間500ミリシーベルト以内としています。100ミリシーベルト以内の発がんリスクは喫煙などと差はない、という見解のようです。

後日、ラッキー博士の論文の茂木氏らによる邦訳全文を掲載します。ご関心のある方はご覧ください。

5月18日論文を掲載しました。

<http://www.newspt.co.jp/data/mailmaga/ronbun.pdf>

159 中部電力への申し入れ

No.33 2011年6月

中部電力の浜岡原発の運転中止に関する私の意見は、前々号の「浜岡原発運転中止要請は是非か」で述べました。

この意見を当事者に届けるべく、以下の内容を中部電力のホームページの意見欄に書き込みました。

2011.5.10

浜岡原発の運転休止について

本件に関しましては苦渋のご決断であったらうと拝察申しあげます。

運転休止の目的は、事故が発生して放射性物質が拡散することを避けることであると思われます。

であれば、一部に報道されておりますような防潮堤の構築等は必須ではないと思われます。

その根拠を、以下の私のブログに記載いたしました。要旨は以下のとおりです。

原子炉が緊急停止後冷却できないことを避けるには

1. 通常電源が確保できる
2. それができない場合、
予備電源が稼働し冷却系が動く
3. そのためには、
予備発電機が動く、
燃料が確保できる、
海水ポンプが動く、
の3条件が必要です。

このためには、3の関係設備が海水の浸水を受けないようにすることです。

ご承知のように福島第1と第2は、この防水条件の差で惨事となるかどうか分かれています。

ご参考にしていただければ幸甚でございます。

不必要な投資をして、株主や電力利用者に余計な負担を強いることがないように願っております。

160 ゴールデンウィークの成果

No.33 2011年6月

ゴールデンウィークの成果今年のゴールデンウィークは、以下の状況だったようです。

高速道路は想定外の混雑で30キロ以上の渋滞は前年比74%増、3日がピークで、60キロ以上の渋滞も多発、空の便は利用者1割減JR東は27%減で過去最大の落ち込み成田からの出国は半減

被災地の行楽地は、賑わいがもどりつつある
関東の観光地は客足が戻ってきている
GW前半は意外に活況
しかしホテルはダメ

これを見ると、なるべくお金を使わないで車で旅行、だから観光地には人が行ったけれど日帰りや1泊2日の短期が多く、ホテルは稼働率低い、ということだったようです。

多くの方は、先の不安に備えて財布のひもを引き締めたのでしょね。

わが家族は一度だけ車で比較的近くのアウトレットモールは出かけました。やはり、かなりの渋滞を味わうことができました。車に長く乗っていられると思えば、いいのです。

それ以外の日は、我が家の外装の手入れをしました。地震に備えるような工事はできませんがきれいにしたのです。築50年以上の家ですが、20年振り以上の手入れでしょうね。

外側の木部・金属部の塗装（茶色のペンキ塗り）、ブロック塀の塗装（グレーのペンキ塗り）、屋上の不要になっているテレビアンテナ2本の撤去、（工事屋は、新設はするけれど古いものの撤去はしないのですね）家と塀の僅かな隙間に植木3本を設置、などです。

「工作」は楽しいものです。家族は「勝手にやっている」と評価してくれません。近所の「おばさん」たちが「よくやるわね」とほめてくれます。

私は、職人さんが機械を使わずにやる作業は何でもできる（質は別として）と豪語しています。自己満足の成果をご覧ください。



福島原発の事故は、まだまだ予断を許しません、米国の調査団も引き上げるようですから、そろそろ原因解明と今後の対策を検討する段階に入っているようです。

政府の事故調査特別委員会は、年内に事故の総括の中間報告を出すそうです。

そこで、素人専門家を自負する私が事故原因を分析してみました。まだ詳細まで追求できていませんが、第1版として公開いたします。以下の図またはURLでご参照ください。

この図は、連関図形式で原因分析をしています。右から左に向かって原因を探っていきます。

起点は、右上方の1番の問題点「福島原発事故被害発生原因」です。被害が発生した原因を解明するのです。

右から2列目の3個の問題点、すなわち、

2. 1次原因（発生原因）
3. 2次原因（流出原因）
4. 3次原因（被害発生直接原因）

が原因の大分類です。

1次原因は、そもそも何が悪かったのか、です。それがなければ事故は起きていません。こういう原因を品質管理の世界では、発生原因（もともと起きてしまった悪いこと）と言います。

1次原因は、原子炉の冷却等を行うための予備電源が使用不能になったことです。そのために燃料棒が高熱になり水素爆発等を起こしています。

予備電源が使用不能になったのは、予備電源が完全防水になっていないタービン建屋に置かれていたからです。

ついでに言えば、冷却用の海水を取り入れる装置も密閉状態ではなかったのです。

電源等が回復した福島第2原発では3月14日19時前に冷却に成功し、その後何らの問題も起こしていません。

第2原発の予備電源は防水が完全な原子炉建屋に置かれていました。

電源が回復して本来の冷却機能が働けば、最短で1時間、長くても2時間半程度の冷却で安全な冷温停止状態にもっていけるのです。

たったこれだけのことができないばかりに大騒ぎになってしまっているのです。今回の事故の発端は予備電源をタービン建屋に設置した、というそれだけのことなのです。

こういうことを「千丈の堤も蟻の一穴から」と言うのでしょうか。

2次原因は、なぜ1次原因がそのまま見過ごされてしま

ったのか、という原因です。品質管理等の世界では流出原因（発生原因がそのまま外に出てしまった、という意味）と言っています。

今回の場合の2次原因は、ほぼ同じ環境（海岸からの距離や海拔高）にある隣の第2原発の建設時に実行したことを、なぜ第1原発についても対応をしなかったのか、ということです。

第2原発では、予備電源を原子炉建屋に置いたのは、予備電源の重要性を認識してのことでしょう。それだったら、第1原発も変更すべき、と考えるのが常識的判断ではないでしょうか。

どうして放置したのでしょうか。これは解明されるべきです。

おそらく、第2原発の設計検討途上で、予備電源の発電機を原子炉建屋内に置くことにしたときに誰かが、「第1原発は、今のままでよいのでしょうか」と発言したのではないのでしょうか。

ところが、その時の責任者が、「いいんだよ。どうせそこまでの震災が発生することはないんだから」というような無責任な発言でその問題提起をもみ消したのではないのでしょうか。

この責任者と、第1原発の設計責任者は、万死に値する重大責任者です。今のこの大惨事はすべてこの二つのことから始まっているのですから。

事故が始まってからの対応が多少まづかった、などは、この二人の責任に比べれば本当に微々たるものではないのでしょうか。

3次原因は、被害が発生することになった直接原因です。1次原因や2次原因の結果です。

これは、

「空気中に放射性物質が飛散した」

「汚染水が流出した」

「それらの被害が拡大した」

の3つに分かれます。

ご承知のように1、3号機の水素爆発よりも4号機の火災（水素爆発？）の方が圧倒的に飛散量が大きいのです。

毎日計測されている放射線のシーベルト値のグラフが、4号機の火災のあった3月15日に飛びぬけています。

汚染水は、9万トン以上ありたいへんな戦いをしなければなりません。4月初めの汚染水の流出を止めるためのドタバタ騒ぎは世間の失笑を買いました。

それらの対応を的確にかつ迅速にできなかったために被害が拡大しました。

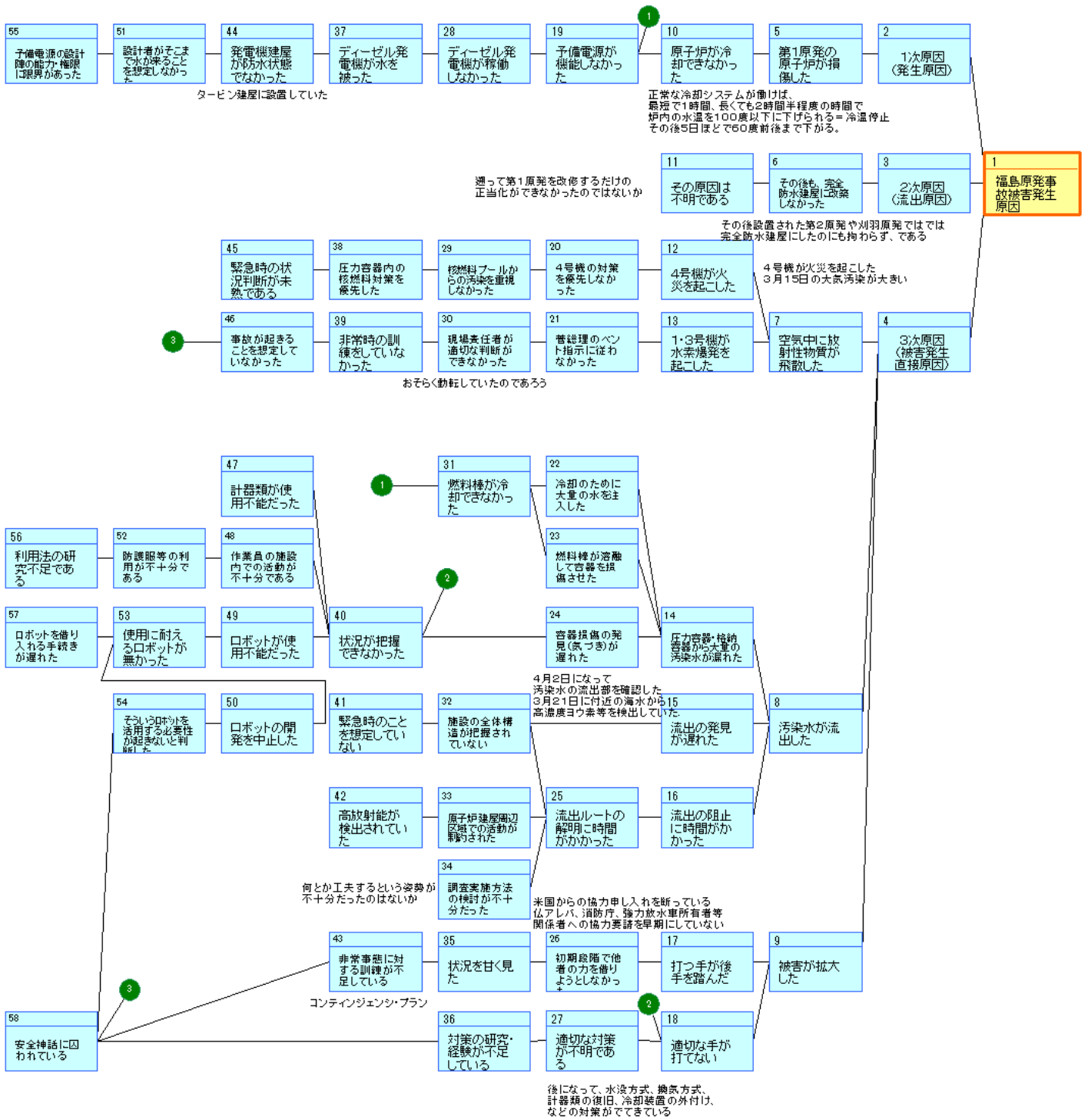
予想しない大事故が起きた時の対応は日本人は苦手なようです。平和ボケしてしまって有事対応ができないのです。

そんなところでしょうか。詳細は図をご覧ください。少しずつ補強をしていく予定です。

(PDF ファイルで掲載)

http://www.newspt.co.jp/data/mailmaga/renkanzu_genpatsu.pdf





たまには柔らかいテーマをお送りします。

5月20日の夕刊にたまたま2件の性的犯罪の報道がありました。

1件は、19日に辞任したIMF専務理事ストロスカン氏です。5月14日に宿泊していたホテルの自室で32歳のホテル従業員に性的暴行を加えた（強姦未遂）という事で逮捕された件です。本人・弁護側は容疑を否認しているようです。

もう1件は、国際福音キリスト教会の牧師が、20代の女性信者に説教して教会内で乱暴した（準強姦の容疑）とされた裁判で、水戸地裁で無罪の判決が出た、というものです。

お二人とも顔を見ると、そういうことがありそうな感じはしますが、先入観を持って判断してはいけません。

後者の判決理由は、「唯一の証拠である女性信者の証言は不自然さ・不合理さがあり認めがたい」というものです。

性的犯罪は、明確に外傷を残すとか死に至るという場合以外は、当事者以外には状況が把握できないのが特徴です。

ご承知のように強姦は、一方が明確に拒絶しているのに強行した場合に成立するものです。

しかし、女性が明確に拒絶している場合に、男性が強行することは至難の業です。通常は外傷を残すような危害を加えないと実現しないでしょう。

後者の事件の状況を想定するに、女性はその時は明確な拒絶を示していなかったのでしょうか。だから実現したのです。拒絶ではないグレーゾーンだったのです。

ところが、何らかの理由で女性側に不満となる事実が発生したのです。たとえば、神父側が何らかの約束を守らない、とかです。それで、腹を立てて訴えたのではないのでしょうか。

ではなぜ、女性がそのことを法廷等で明らかにしないのかというと、「その条件があったから合意で性行為をした」ということになると、暴行や強姦罪が成立しなくなるからです。

そういうことから「証言に一貫性がない」ということになったものと想定されます。

前者の事件の真相は分かりませんが、そのホテルの従業員が馴染みでなかったのなら、ストロスカン氏の状況判断がまずかったということでしょう。

「その可能性」があるかどうかは、分かりそうなものです。

電車の中の痴漢について、私は疑問に思っていることが

あります。痴漢行為の証拠は、多くの場合、被害者である女性の証言しかないのです。

それで、女性が「この人が何かした！！」と言えば、「この人」は捕まってしまうのです。

最近は、ときどき無罪判決が出ています。犯人らしき男性を捕まえる警官は、妬みからでしょうかね、いい加減です。女性の言うことは間違いないという思い込みは、男性にとって本当に迷惑です。

先日もある大企業の部長さんが、「疑われるのが嫌だから手を上にあげている」と言われるのです。

私は、痴漢行為が成立するのは、お尻に手が触れたという範囲ではなく、明確な意思を持って手を動かし下半身を触った、とか、スカートの中に手を入れた、とかの場合と思います。これはクロです。

しかし、実際にはグレーが多いのではないのでしょうか。誰も手を出しそうにもない女性が、グレーの現象に対して自意識過剰・神経過敏で「痴漢です！」と騒いだりする面もあると思います。

もともと性行為は、ビジネス行動ではありませんから、あいまいなところが多いのです。

誘ったときに「いや」というのは本当にいやなのか、言った当人の気持ちも微妙で揺れ動くということがあるでしょう。ですから、「粘り勝ち」で結婚した、なども起きるのです。

「いやよ、いやよ、も好きのうち」という「名言」もありますし。

食べ物の好き嫌いもどちらかに決めたりしますが、圧倒的にグレーゾーンのものが多いですね。

好き嫌いは全般的にグレーが多いのです。

ですから性的犯罪もそういう見方で裁く必要があるでしょう。そうすると「疑わしきは被告の利益に」となることが多いのではないのでしょうか。

以上、男性擁護論でした。

菅総理は、総理の器ではないと盛んに言われています。東電の社長は、みじめだと言われています。でも自民党のあの人もダメだな、とか、

何が足りないのでしょうか。そこで、成功するトップやマネジャーの条件を研究するためにミンツバーグ教授の「マネジャーの実像」を読みました。

この本は、29人のマネジャーに密着取材してマネジャーの行動を把握・分析した大部の作品です。

マネジャーの日常行動の探求は、それはそれで、たいへん興味深い人もいられるでしょう。文献としての価値がある

と思われます。

しかし、「ではマネジャーはどうしたらよいのか」については、どうも決め手に欠けるきらいがあります。

たとえば、

「優れたマネジャーの条件」はこれまで多数挙げられてきた。たとえば、勇気、献身的姿勢、振り返りを重んじる姿勢、洞察力、人脈が豊かであること、思慮深さ、賢明さ、人々を鼓舞する力、不屈の精神、協働志向、愛嬌。だが、そんなすべての条件を満たすマネジャーなんかいない。

と述べています。

そのとおりだと思います。置かれた環境条件、自らの個性から十人十色のマネジメントスタイルがあるのでしよう。

それを言えば、何も原理原則がないことになってしまいます。偏っていても「こうすればよい！」と言われれば100人中何人かには当てはまって成果に結び付くと思われれます。

そこで、ミンツバーグも、今回の分析の中からいくつかの成功要因を挙げています。

- 分析力
- 広い視野
- 協働力
- 積極行動
- 統合能力

です。

おそらく、このいずれかが全くダメで成功しているマネジャーはいないでしょう。

これとは別に、「現場から遊離してはいけない」と、現場の重要性も説いています。「事件は現場で起きている」のです。他にもいろいろなことが述べられています。何しろ430ページもの大作ですから。

でも、何か物足りません。そこで私なりに考えてみました。

【マネジメントの成功要因】

「マネジメントとは、自分に与えられたミッション（使命）を他の人の力によって実現することである」というメアリ・パーカー・フォレット（1920年代の経営学者）の説が本書でも何回か紹介されています。

この定義は、まさにマネジメントの本質を突いた定義であると私も以前から感服していたものです。

この定義からすると、マネジメントの成果であるところの「自分に与えられたミッション（使命）を他の人の力によって実現する」という目的を達成するには以下の3要素が必要であると考えられます。

1. （マネジメントのインプット）情報を収集する
2. （マネジメントのプロセス）的確な判断をする
3. （マネジメントのアウトプット）他の人の協力を得る

【1】

まず、1番目の「情報を収集する」につきましては、自分は直接現場にタッチしていませんので、いかに現場の適切な情報を収集できるか、がマネジメントができる前提条件です。裸の王様にならないように、よい情報だけでなく「悪い」情報も得られるようにする必要があります。

マネジャーの最大の課題は、いかに現場から離れないでいられるか、です。現場から離れて現場の情報も得られないと、空中遊泳状態になってしまいます。

誰もマネジャーになる前は、どこかの現場で苦労して現場感覚を持っているのです。現場にいるときは、有視界飛行です。これに対して、マネジャーになると計器飛行となります。かなり様相が異なります。人により得手不得手があるでしょう。

できるマネジャーは、現場から離れても、いかにして現場からの情報を的確に取り入れられるかを知っています。

-----寄り道
ダイエーの中内功さんはいつまでもお店に顔を出しておられました。有視界飛行です。

中内さんは現実のお店のレイアウト、店員の仕事ぶり、店の陳列や品ぞろえに関心がありました。消費者が本当に何を望みだしているのかについてはあまり関心が向かなかったようです。消費者の望みは昔と変わっていないと思いこんでいました。それが、ダイエーの凋落原因となったのです。

最近出版された「総合スーパーの興亡」東洋経済新報社では、ダイエーの「潰れてしまった」原因は、人材配置を間違えたことだ、その最たるものは自分が総合スーパー業を担当したことだとなっていました。そうでしょうね。

中内さんは、息子さんを計器飛行のマネジャーとして育てようと思われました。しかし、成功しなかったようです。有視界飛行の成功者が計器飛行をマスターすれば、偉くなるのですが、最初から計器飛行だけという道はないでしょう。

最後に着陸するときは有視界飛行です。すべて計器飛行ができるなら、パイロットは不要になります。

-----寄り道終り

いかに的確な情報を得るかにつきましては、当ブログでも4月28日の「なぜ「想定外」が起きてしまうのか」で取り上げました。たいへん大ざっぱな結論は、聞く側の姿勢の問題だということでした。

【2】

2番目の「的確な判断をする」はミンツバーグの指摘だと、「分析力」と「広い視野」が該当しそうです。たくさんの方の情報に恵まれてもそれらを選別し的確な判断をする能力を持っていないければ「猫に小判」状態です。

判断が的確かどうかは、その時点では分からないこともあります。その場合は、結果で適否が判明するのです。

「浜岡原発を止めて防潮堤工事をせよ」は的確な判断でしょうか。別項「浜岡原発の運転中止要請は是か非か」をご参照ください。

【3】

3番目の「他の人の協力を得る」はマネジメントの定義からして必須事項です。

その意味で対人関係能力のない人は、マネジャーになってはいけません。自分で専門職や職人としての任務を遂行する方がその人が幸せでしょう。

マネジャーの対人関係能力で重要なのは、他の人を鼓舞してその気にさせることです。プロ野球の監督を見てみると、そのスタイルは違いますが、この能力のない方は成功していませんね。

これから先の議論は専門家にお任せします。

【トップの成功要因】

次はトップの要件です。それは、ビジョンとマネジメント力と強さの3本柱でしょう。

● マネジメント力

トップもマネジャーですから当然マネジメント能力が優れていなければなりません。

● ビジョン

それに加えて、自らがその組織の方向性を決めなければなりません。それがビジョンです。

ワタミの創業者渡邊美樹さんは、「地球上で一番たくさんのお金を集める」という企業にするというビジョンをお持ちです。これだと業種不問で通じます。その目標を目指して日々改善の努力を行うのです。

松下幸之助さんは、「社会生活の改善と向上を図り、世界文化の進展に寄与する」でした。高次元ですね。

ヤマト運輸は「全国どこへでも翌日お届けする」でした。

日本電産は「世界と人々の（今日と）明日のために、「世界初」「世界一」を追求する技術と製品で快適な社会づくりに貢献をつづけます」です。松下幸之助さんのに似ています。

このようなビジョンを社内外に提示してその方向に突き進むのです。ビジョンがなければ進む方向が分かりません。

その意味で、菅総理は、日本をどういう国にしようとしているのかのビジョンが示せていないのです。

「自分の保身だけを考えて、妥協を続けているだけではないか！」と言われてしまいます。

● 強さ

当然ですが、トップたるものは、精神・肉体とも強くな

ければ務まりません。これが基礎条件です。

その点、菅総理は何とかなっているようです。東電の清水社長は、途中休場してしまいました。おそらく肉体よりも精神のダメージが大きかったのではないのでしょうか。

ということで、トップの要件は、基礎に「強さ」があり、「ビジョン」を示して「マネジメント力」でそのビジョンを実現するのです。ということのようですね。以上を整理すると、こういう図柄です。



ここまで整理をして、自分の振り返りになりました。

164 「括弧の意味論」

No.33 2011年6月

難しいことを言っている、そんなことを研究している人がいる、その目的は何だろう？と思って、その本を読ん

でみました。著者は木村大治京都大学助教授で、専門は、アフリカ地域研究専攻だそうです。ですから、専門外の研究書です。

こんなことが書いてありました。

括弧は、一般に括弧として文書作成で使用しているもの以外に、傍点付け、下線付け、白抜き表示なども広い意味の括弧である。

括弧には大きく分類すると2種類ある。

統語論的括弧と意味論的括弧である。

前者の例は

小さな画用紙（はがきぐらいの大きさ）を用意する
美しき「水車小屋の娘」引用を示すもの
発言の区切り

数学の括弧

後者の例は、

「菅側近」と「小沢側近」ゴマすり「バカ」比べ
「進歩的」と自称する人々

でもなんて難しい言葉を使うのでしょうか。

統語論的括弧は、

「文章の構造を示す括弧」
「文章の部分の関係を示す括弧」
「構造表示括弧」

意味論的括弧は

「文章の一部に特別な意味づけをするための括弧」

「特別な意味を表すための括弧」

「意味づけ括弧」

とでも命名すればよいのに、と思いました。

でも研究書ですから、実証的な調査もしていました。

週刊誌（朝日、文春、新潮）の年代別括弧の出現率は1960年から漸増して、今は10%くらいで横ばいのようです。強調するための括弧であっても多すぎればうっとうしいですからね。この%は、全文字中で括弧がどのくらいを占めるか、です。10%と言ったら凄いですね。

もう一つの調査は、個別の著書の括弧出現率です。

芥川龍之介「河童」…… 2. 6%

森鷗外「舞姫」…… 0. 7%

夏目漱石「坊っちゃん」… 0. 8%

夏目漱石「こころ」…… 0. 9%

会話文の多少が影響しているだろうとのこと。哲学書は概ね多く最高の例は6. 5%でした。

そんな難しいことを知らなくても文章は理解できる、何がよくなるのか、と思います。どうも「良くなる」ご利益はないようでした。研究としては、何かの意義が出てくるのでしょうか。

おもしろかったのは、「——な——んちゃって」やカタカナ表記も、統語論的括弧なのだそうです。なるほど、ですね。

「な——んちゃって」は、最後にそれを言うことでそれまでのことをお茶らけムードの括弧にくるんでしまうのです。

結論から言うと、私が期待する「括弧の使い方はこうすればよい」というガイドは得られませんでした。最後に「使い過ぎはよくありません」ということが一言だけ書いてありました。

推定するに、出版社側が「どうすればよいかというガイドを入れてください」と注文したのではないのでしょうか。「そのつもりで書いているのではない」と著者が抵抗したでしょうが、妥協して、最後にこの文言を付け加えたのでしょうか。

久々に学術的な図書を読み、ずいぶん違う世界だな、と思いました。

因みに私は常に、特にこのブログでは、括弧はなるべく使わないようにしています。

皆さまに、あまり「意味のない」文章を読んでいただいて、申し訳ありませんでした。

165 柔よく剛を制す

No.33 2011年6月

5月24日の日経新聞に以下の記事が載っていました。

「ひょうたん島」 松生き延びた
岩手県の蓬萊島（ひょっこりひょうたん島のモデルなの

だそうです）に生えているアカマツが奇跡的に津波を生き延び、復興のシンボルとして注目を集めている。

——中略——

この島には、社と鳥居、灯台があった。津波で鳥居と灯台は流され、陸と結ぶ堤防もなくなったが、松は残った。

根元からポッキリ折れた灯台と残った松を含む島全体の写真が載っていました。高さ3～4メートルの2本の松は比較的元気なのだそうです。

同じく日経新聞ですが、5月15日に「瓦礫の中の若木」というタイトルで巖谷國士という方がこういうことを書いておられました。名文なのでそのままご紹介します。

3月18日のテレビの画面に、三陸のとある港町の映像が映った。

大津波におそわれて壊滅し、いちめに瓦礫の堆積する住宅地のなかを、ひとりの高齢の女性がさまよっている。行方不明になった幼い孫娘の写真をもって。

つい1週間前まで家のあったところへ来たが、建物は跡形もない。すさまじい残骸のあいだに、1本の細い若木が見つかった。

ひょろりと垂直にのびているその若木は梅で、あの大津波にも根こそぎにされなかったばかりか折られもせず、厳寒のさなかに、新芽と小さな蕾さえつけているように見えた。

——中略——

梅の苗は孫娘の産まれた記念に植えられたのだという。今はこの世にいない彼女の身代わりのようにして、若木は育っている。

もしかするとその後、瓦礫の中で花を咲かせたかもしれない。

感動的な内容です。巖谷さんは仏文学者なのだそうです。さすがですね。

次に、5月22日の日経新聞ですが、以下のような記事が出ていました。

現在の高層ビルは、耐震・免震構造になっていて、ビル自体は地震に耐えられるが、中の梁や天井などが外れるとか落ちるとかの被害がある。これに対して対策を取ろうということで、建築業界で研究を始めている。

ご存じのように高層ビルは、しっかり壊れないように固く作るのではなく、地震の揺れを受け流すように作る柔構造が、現在の主流です。柳の木の原理です。

「ビルが倒れない」という目的を追求してできたのが、柔構造です。現在の要求は「倒れないだけでなく、内装が壊れない」となったのです。

その目的を達成するように研究が行われているのです。おそらく内装自身も柔構造にするしかないでしょう。

この目的が達成されたらどうなるのでしょうか。「船酔い

のように気持ちが悪くなる揺れをやめてくれ」とでもなるのでしょうか。

翻って、福島原発です。5月25日の朝日新聞に、「第1原子炉の冷却給水用の配管が地震で破損していた疑いが出てきた」ことが報道されていました。

これが事実とすればこういうことでしょうか。「原子炉容器は頑丈に作ったが、そこに繋ぐ配管は、原子炉側の揺れを吸収できる柔構造になっていなかった」

以上を通じて言えることは、昔から言われる「柔よく剛を制す」です。

以下は余談です。

これで思い出すのは、空手と合気道の違いです。

空手の基本的な攻撃は突きとか蹴りです。言わば剛です。

これに対して、合気道は相手が攻めてくる力を利用して相手を制します。柔と言えるでしょう。ですから女性でもできるのです。

私が学生の頃、空手・柔道・剣道の道場（練習場）に一人で黙々と合気道の練習をしている「薄汚い」男がいました。

空手部の仲間は「邪魔な奴だ。おかしな奴だ」という目で見ていました。この男が東大の合気道部の創始者である亀井静香氏でした。

彼の政治的なスタンスは、柔ではなく攻め込む剛のようです。お得意の柔の要素をもう少し取り入れたらよいのではないのでしょうか。

166	日本人の成り立ち
-----	----------

No.33	2011年6月
-------	---------

うっとうしい日本の現状から、少し離れた話題です。

私は、日本人の一人として、日本人の成り立ちには、以前から強い関心を持っていました。

多くの考古学者、民族学者、言語学者、文化人類学者が研究をしていますが、何といてもオーソリティは埴原和郎先生です。

埴原先生は何冊も著書を出しておられますが、初めのころは、日本人の「起源論」でした。その後、1990年に出された著書は「日本人」新「起源論」でした。

それが、1995年には「日本人の成り立ち」となりました。

起源論というと、単一民族論で、「日本人はどこからきたか」とか「どこから始まったか」を解明するという感じがしますが、「成り立ち」だと、「どういうプロセスででき上がったのか」という前提となります。

現に、埴原先生の説はそういう内容です。簡単にご紹介

します。

最初に日本に来たのはアフリカから出発して東アジアの先端までやってきた狩猟採集民族です。この人たちは、人種的には東南アジア系です。

この人たちが約1万年続いた日本の縄文時代の主人公です。北海道から沖縄まで全土に亘っています。

その後、紀元前後の弥生時代にシベリアあるいは中国東北部、モンゴルの北アジア人が、恐らく朝鮮半島経由で九州近辺を中心に渡来しました。

彼らは農耕民族で、この農耕民族は狩猟採集民族よりも生産性が高かったために、短期間に日本中に浸透しました。

ということで、埴原先生はこの状況を称して「2重構造モデル」と言っておられます。

骨相的には、縄文人はタヌキさん顔、弥生人は狐さん顔、血液型的には、縄文人はB型比率が高い、弥生人はA型比率が高い、その証拠に、弥生人の浸透が比較的薄い東日本では西日本よりも、B型の比率が高い、というようなことです。

私は、埴原先生の事実指摘に対して、こういう解釈を付け加えています。

狩猟採集民族は、目利きが非常に重要です。「どこに食料がありそうか」という当りをつけてそちらに進んでいくのです。

この「目利き」はB型の得意とするところですが、B型の人間が主導してユーラシア大陸の東端までやってきたのです。

A型は、じっくり型で農耕に適しています。農耕に優れているA型民族が、弥生時代の渡来人なのです。

最近、瀬川拓郎さんという旭川市博物館副館長をしておられる考古学者が書かれた「アイヌの世界」を読みました。

私は、8年強、札幌にいたこともあり、アイヌには特別な関心があります。

この本からの私としての成果の一つは、他の学者の研究成果の紹介ですが、DNAの分析結果から判明した以下の事実です。

まずは、安達登氏の研究成果の紹介です。北海道縄文人（アイヌの祖先）のDNAは著しく多様性が少ない（＝混血が少ない）。そのDNAは大陸北東部先住民との共通性がある（上野注：これは前掲の埴原説の日本の原住民が東南アジア系というのと異なります）。

近世アイヌ人のDNAは多様性を持ち北海道縄文人と大きく異なる。なおかつ、このDNAには縄文人にも本土日本人にもないある型を含んでいる。

この型は、北アジア先住民に特有のものであり、古代にサハリンから北海道に南下したオホーツク人も持ってい

る。(注：近世アイヌ人は、縄文人とオホーツク人の混血です。ただし、近世アイヌ人は現日本人とは別です)

以下は、百々幸雄氏の研究成果の紹介ですが、頭骨の部分の形態の分析から、近世アイヌ人と縄文人は近いが、この二つは、アフリカ群、ヨーロッパ群、東・東南アジア群のいずれにも属さないで浮いている(人種の孤島)。

(日本人・沖縄人は、東・東南アジア群に属しています。ということは、アイヌ人と沖縄人は別の群に属している、ということです)

本書には北海道を舞台とした、アイヌ人と北方民族であるオホーツク人、アイヌ人と本土日本人とのせめぎ合いの歴史が紹介されています。

そんなにダイナミックに民族の境界線が移動するものかと非常に興味深かったのですが、瀬川氏の研究の真髄は、言葉や熊祭りの文化の形成史です。

本稿の結論です。

安達氏説だと、原日本人(少なくとも旧アイヌ人)は東南アジア系ではなく、東北アジア系ということになります。

百々氏説だと、アイヌ人と沖縄人は別の人種に属することになり、埴原先生の、「原日本人が北海道から沖縄まで住んでいた。アイヌ人と沖縄人は同一種である」という説に反することになります。

このように日本人の成り立ちについては、いろいろな学説が出てきています。

これから、DNAによる分析が進んで、明確な結論が出ることを期待したいものです。